

# 《2023/JBS創立50周年記念例会/ブラームス生誕190年》

2023 is the 50th anniversary of JBS foundation. The 190<sup>th</sup> birth anniversary of Brahms.

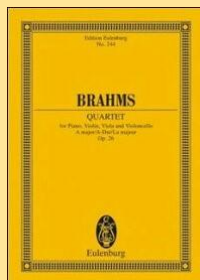
レクチャーコンサート2023 / Lecture concert 2023

## ブラームス/ピアノ四重奏曲第2番の再評価

*Evaluation of Brahms Piano Quartet No.2 in A major Op.26*

1番(Op.25)と2番(Op.26)を比較

- |      |            |                              |           |
|------|------------|------------------------------|-----------|
| ■ 1部 | 50周年記念講演   | ／ 「創立当時の思い出」 (30分)           | 予定時間      |
|      |            | JBS 初代会長 染川英輔                | 1:00~1:30 |
| ■ 2部 | レクチャーコンサート | ／ 「ピアノ四重奏曲2番イ長調 Op.26」を再評価する |           |
|      |            | 前半 50分 休憩 15分 後半 50分         | 1:30~3:25 |
|      |            | JBS 顧問 西原稔(桐朋学園大学名誉教授)       |           |
| ■ 3部 | CD鑑賞       | ／ 「ピアノ四重奏曲2番 名盤抜粋」 (60分)     | 3:25~4:25 |
|      |            | JBS 幹事 佐藤元哉                  |           |



レクチャー・コンサート



染川英輔 初代会長



西原稔 顧問

# 2023年3月26日(日) 1pm (ご注意)

チケット 一般¥3000 会員¥2500 学生¥2000 当時現金払い

会場 ムジク・ピアフォーヌ (駒場ピアノサロン) 30名/定員70席

京王井の頭線、駒場東大前駅・西口改札下車徒歩5分

- 関連例会 2023年 JBS50周年記念 ヤマハ銀座店共催  
夏例会 No160 (P四重奏曲2番ほか)
- 後援 ハンブルク国際ブラームス協会、米国ブラームス協会
- ご協力願い 「感染対策」にご協力をお願い致します。  
コロナ状況で人数が変更となる場合があります。
- 主催 日本ブラームス協会(事務局)  
Tel/Fax 050-3648-0002 留守電  
eメール [jbs1973\(a\)jcom.home.ne.jp](mailto:jbs1973(a)jcom.home.ne.jp)
- JBS-HP <http://japan-brahms-society.org>



## ■「ピアノ四重奏曲第2番」の魅力

ブラームスの室内楽作品の中で不幸にして演奏される機会の少ないのがこの「ピアノ四重奏曲第2番」作品26である。その理由は作品が長いからであろうか。しかし、筆者の意見では「ピアノを含む室内楽作品の最高傑作」と言っても良いのではないだろうか、と考えている。第2番は確かに第1番や第3番と比べると地味かもしれないが「作品の中に込められた作曲家の楽想の展開」はこの2曲の比ではない。

**第1楽章** トリルの動機で開始する表現は一見、平明である。しかし、その平明な楽想から次第に湧き上がるさまざまな表現は、あたかも映像を見ているかのようでもある。そして、最後は、力強くトリルの動機で締めくくられる。トリルの動機がこれほどの表現可能性があることをまざまざと見せつけてくれる点で、ブラームスの力量を遺憾なく発揮している。

**第2楽章** この作品が真に独創的なのはこの楽章によるところが大きいであろう。何の変哲もない長閑な主題で開始する。そしてその後、第1楽章と同様に胸騒ぎを思わせる2度のトリルの動機が続き、闇から吹き上がる一陣の風のような分散和音が舞う。この3つの動機がこの作品のストーリーを形作っている。この一陣の風を思わせる分散和音の動機は、「ヴァイオリン・ソナタ第2番」作品100の第3楽章や、おそらくこの第3楽章と結びついている「低声のための5つの歌」作品105の第4曲「墓地にて」の表現とも結びつきを感じさせる。もちろん、後者の作品はこの「ピアノ四重奏曲」の創作の後の作曲である。

2度のトリルの動機のうめくようなこの動機のなかにブラームスは何を意図していたのであろうか。そして分散和音の動機のなかに彼は何を込めたのであろうか。何かブラームスを強いメランコリーが襲ったかのようである。……この時期のブラームスの最大の悩みは父母の不和であったが、それがメランコリーの原因であったのであろうか。それとも部屋を借りていたエリーザベト・レージグ夫人が原因であったのであろうか。シューマンの使用したコンラート・グラーフのピアノをクララ・シューマンから譲り受けたブラームスは、部屋を借りていたレージグ夫人の家にこのピアノを預けており、このピアノでこの作品を作曲したと考えられている。作品はレージグ夫人に献呈されており、同夫人とは良好な関係であった。……

トリルの動機に導かれて、ピアノが「嘆きの歌」の主題を奏する。この作品ではこの「嘆きの歌」が非常に重い表現を担っている。「嘆きの歌」と言えばベートーヴェンがバッハの「ヨハネ受難曲」の主題を用いて、それを「チェロ・ソナタ第3番」作品69第1楽章や「ピアノ・ソナタ第31番」作品110の第3楽章で用いたことで知られる。ブラームスは当然、ベートーヴェンの「嘆きの歌」の旋律は知っていた。嬰へ音を頂点に下行する音階動機は「嘆きの歌」の旋律と共通である。仮に「嘆きの歌」が背景になっているとすると、ブラームスのなかで尋常ではないきわめて深い精神の危機があったのであろうか。というのは、「ヨハネ受難曲」で用いられるこの旋律は、イエスの処刑ののちにヴィオラ・ダ・ガンバに前奏で歌われるアリアの旋律だからである。「ピアノ四重奏曲」では最後はトリルの動機と分散和音を繰り返しながら、魂の救済を思わせる陽光が差し込んで締めくくる。見事なドラマである。

**第3楽章** 「スケルツォ」、第2楽章が最後に魂の安息を得た安ど感のようなものが表現されている。しかし、1850年代のスケルツォとは明らかに異なっている。かつてのアグレッシヴな表情は陰を潜め、跳躍音程の主題は躍動的な情趣に満ちている。この楽章で注目したいのは、第55小節からの部分である。ピアノが付点2分音符の動機を奏し、弦楽器群は高い音域から冒頭の主題の動機を用いて跳躍音程で下行する。そして、弦楽器群がコラールを思わせる付点2分音符の動機を奏し、ピアノは下行分散和音動機を奏する。この表現が、ショパンの「スケルツォ第3番」作品39の表現と類似している。ブラームスはショパンから影響を受けたのではないだろうか。ブラームスのショパン受容はこれまで注目されてこなかったが、1870年代に入り彼はブライトコップ・ウント・ヘルテル社の依頼でショパン全集の校訂を手掛けているだけでなく、演奏会でショパンの「ピアノ協奏曲第1番」作品11を演奏している。さらに、「8つの小品」作品76にはショパンからの主題の借用が見られ、ブラームスにおけるショパン受容は注目したい。

**第4楽章** フィナーレは第1番と同様にハンガリー舞曲の表現を採り入れ、快活ではあるが第1番のような祝祭的な印象ではない。とくに第85小節からの、冒頭とは対照的な表現はより抑制的であり、非常に高貴である。この「ピアノ四重奏曲第2番」は同第1番とも、その次に作曲される「ピアノ五重奏曲」とも異なる独特な光彩を放っている。

ぜひ、この作品の真価を再認識してもらえる機会になればと思う。